Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

160-117
1200800012457

生活小史

160-117

金閣小史目次

—口繪—

一、金閣雪景（玻璃版）
一、後水尾帝宸翰（同）
一、門山夢窓國師筆跡（同）
一、開基義滿公法體像（同）
一、若冲筆葡萄壁畫（同）
一、金閣上の鳳凰（同）

—記事—

一、興造緣由
一、位置封彊
一、結構規摸
一、開山履歷
一、著名歷代

大正
12.4.10
内交

一、寺門格式
一、著名事項
一、皇室關係
一、武將歸仰
一、貴重寶器
一、歷覽順序
一、文溯先生筆鹿苑寺記(漢文)
一、美術建築としての金閣
一、再中興貫宗長老略傳

—附　錄—

一、英文案內記 (The short guide book)

—卷末挿繪—

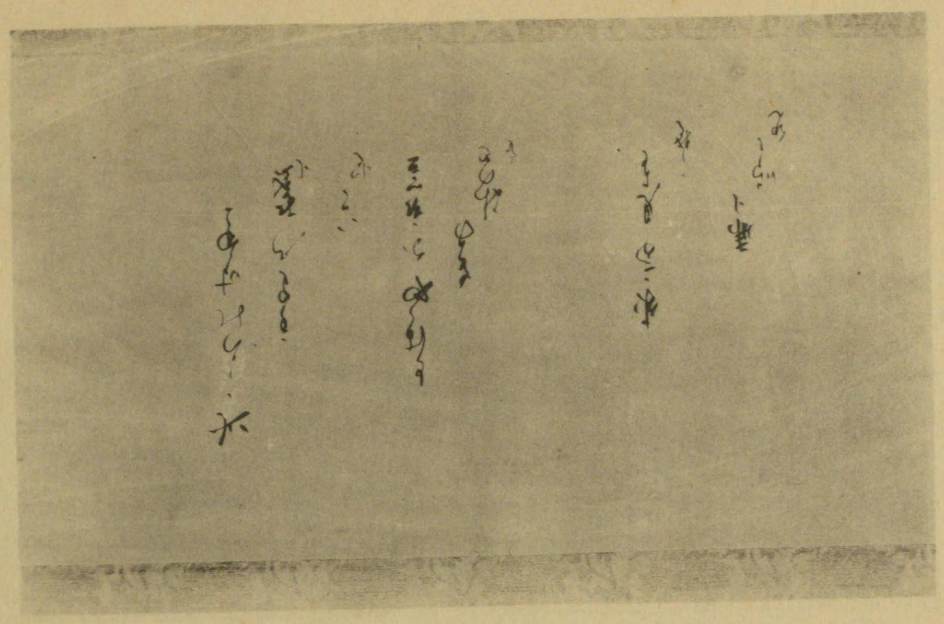
一、金閣の寫意畫現住放光畫(玻璃版)

里程概略表 (金閣寺ヨリ)

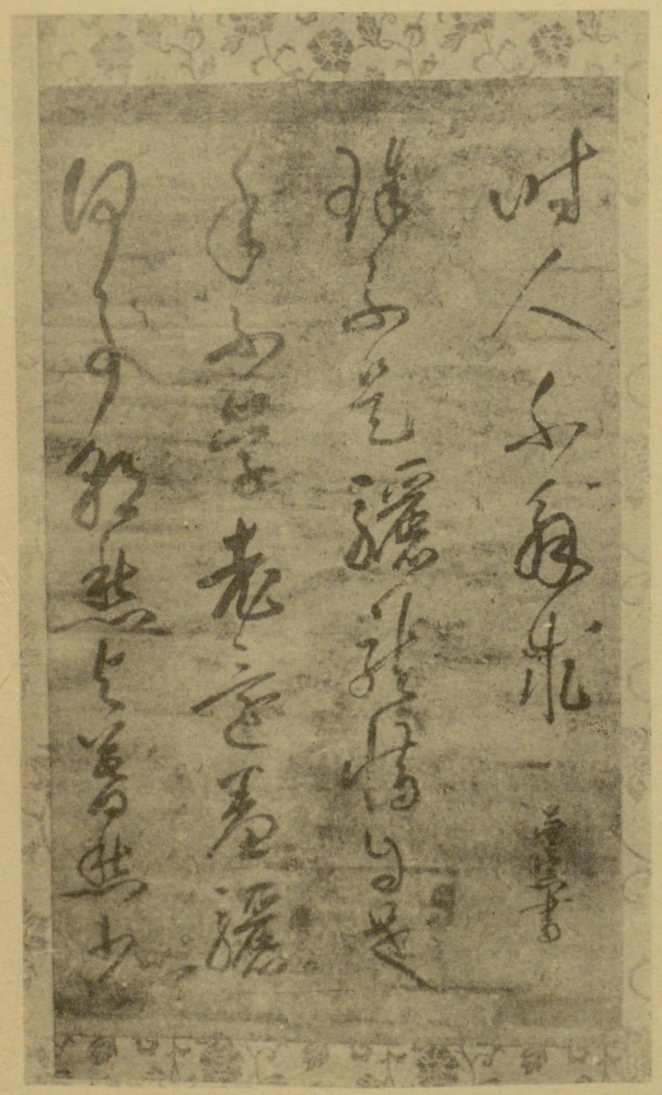
東南ノ部	平野神社	八丁
	北野神社	十丁
	二條離宮	廿三丁
	二條驛	廿三丁
	御相國寺	廿五丁
	所	三十丁
東北ノ部	建勳神社	十二丁
西南ノ部	大德寺	十五丁
	上加茂	三十丁
	下加茂	三十丁
	等持院	十三丁
	妙心寺	十八丁
	花園驛	二十丁
	御室	廿三丁
	嵐山	二里

花園ヨリ汽車ノ便アリ

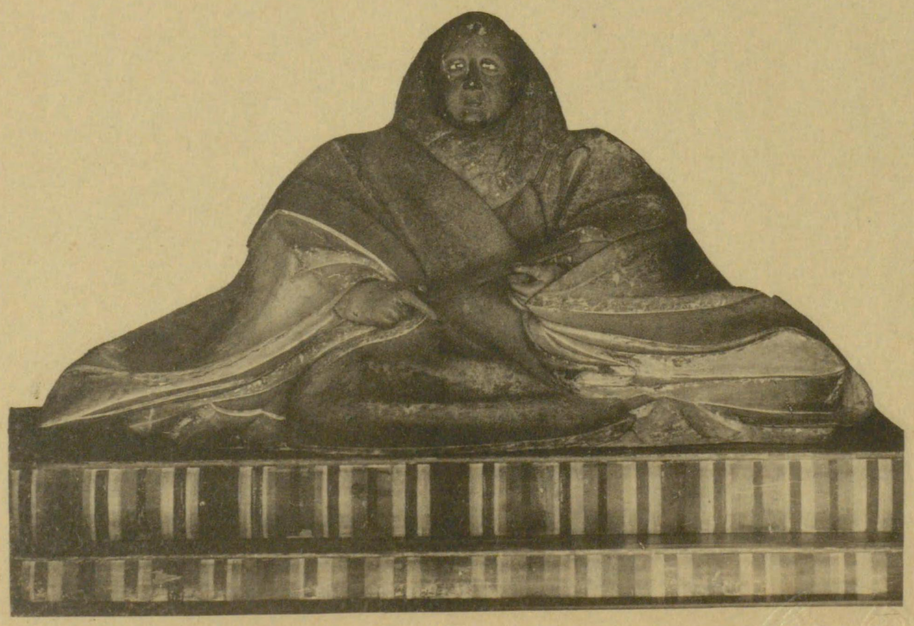
金閣　景雪



（歌の山笠丈）　翰宸帝尾水後

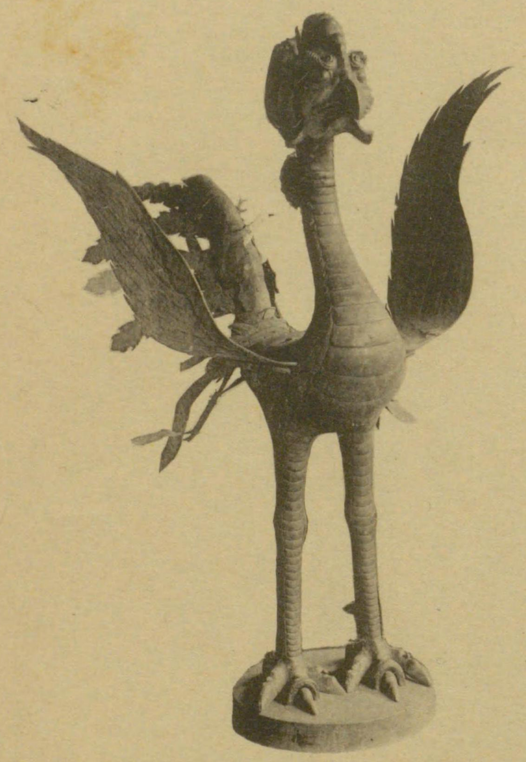


開山夢窓國師筆蹟



開基足利義滿公法躰像（國寶）

葡萄障壁画　(若冲筆)



金閣上の鳳凰

金閣小史

臨濟宗北山

鹿苑寺

興造緣由

當地は往昔西園寺公經卿の別業なりしも應永四年足利三代の將軍義滿斯地の景勝を慕ひ之を請ひ得て新に鳳閣龍池を築き世務を謝して台居せらる公專ら單傳の妙旨に歸し佛日常光國師に參じて剃髪し法名を天山道義と號す應永十五年薨去四世將軍義持に遺命し禪林に革めしめ夢窓國師を請して開祖とす

位置封彊

位置山城國葛野郡若林庄衣笠村大字大北山小字鏡湖にあり衣笠山の東紙屋川の西前面曠漠の北野に沿ひ背後聳目の層巒に靠る封彊四萬壹千拾七坪官有地第四種に屬す古しへは寺領三千五百石其後一千二百石に減じ秀吉公以後は寺領三百五十石東西十六丁南北十五丁となりぬ

結構規摸

往昔寺領三千五百石境域三里其結構の豪壯にして規摸の宏大なる推して知るべし黄金臺を築きて鐵鳳上に翔り拱北樓に架して長虹空に横る山圍み水繞り麋鹿濯々白鳥鶴々たり名花異艸奇石怪松各其所を得隆樓

傑閣畫棟彫梁東西南北に碁布星羅す總門は紙屋川の西にあり礎石今尙存す御所を芳德といふ八棟造り八龍を立てゝ金色に彩り紫宸殿拱北樓の間には反橋を架し往來の人をして空を歩むかと疑はしむ看雪亭、泉殿、護摩堂、懺法堂、舍利殿、天鏡閣、小御堂、地藏堂、三身堂、不動堂、大塔、輪藏鐘樓等甍をならへ檐をつらぬ此外寮舍拾院あり皆古史歷載の名藍なり何れも當時諸候の士を土木に役して構造するところなれば其壯麗思ふべし今僅に存するものは金閣と庭園のみ現今の殿堂幷に諸建物及其建營年度左に

金　閣　應永四年足利義滿建立（明治三十年十二月二十八日內務省の指定を以て特別保護建造物に編入）

附言　明治三十七年七月官國庫を開て大修繕の工を起し同三十九年九月に到り全く竣工を告ぐ前後三年月を閱する事二十有七質を費すこと貳萬貳千八百餘圓（此內寺門負擔額金四千圓）此間老練の技師熟達の工匠と舊規を攷へ古法に則り一繩一墨も忽諸に下さず輪奐の美燦然として應永の舊態に復するの觀あり

漱清　同上

方丈　延保年中　後水尾天皇勅營

大書院　享保年中第五世文雅東堂再建

小書院　同上

鐘樓　同上

鎭守　同上

唐門　天保年中北澗東堂再建

夕佳亭　明治七年再建

不動堂　天正年中浮田中納言再建

庫裡　天保年中北澗東堂再建

拱北樓　明治廿七年貫宗長老再建

此他附屬の建物二十字は皆天保年間の再建なり

鹿苑寺六勝及其詩

夕佳亭

亭榭黃金界　林園好一臨　晚來鐘磬響　瀟灑空人心

天鏡閣

紺園高寶閣　湧出逼虛空　縱倚窺天路　兼知呼吸通

龍門泉

飛泉千萬丈　何處落人間　不啻鯉魚化　天龍自往還

鏡湖池

滿目芙蓉水　香風鏡裏波　忽聽梵貝起　疑是采蓮歌

不老名

頑然一斤石　何歳在神州　鹿苑長開法　由來幾默頭

渡橋橋

小橋如畫裏　煙樹擁山河　不見牛羊下　時逢樵者過

境内八勝

法水院　潮音洞　究竟頂　鏡湖池　巖下水　龍門瀑　銀河泉　安民澤

同　八景

鷹峯晴嵐　六所夜雨　金閣秋月　鹿苑晩鐘　卽休夕照　衣笠暮雪　鏡湖鴛鴦　龍門瀑布

同　十鏡

天鏡閣　拱北樓　鏡湖池　釣雪橋　縱目峰　菩提溪　宣明室　明王殿

榊雲廟　安民澤

同　名石

夜泊石　九山八海石　赤松石　畠山石　臥龍石　出龜入龜　臥牛石　大黒石

走馬石　屏風石　渡天石　布袋石　女龍石　露盤石　雲根石　採蘋石

鏡石　猿巖　夜啼石

同　名勝

天山竹　窠鳳林　夜泊　瞳眠　無準是誰阿崇

排壠盜風竹　溪照山西笑北溯得閑鷲峰

對雲晴雲　菖蒲溪　望雲澤　雨賜澤　常觀溪　龍觀溪　渡橋橋

小屋溪　無語溪　春日宮　紙屋川　飲馬川　小松臺　葦原島　紅葉山

出島　淡路島　虎溪橋　白龍塚

同　名水

巖下水　銀河泉　獨鈷水

同　名木

ワビスケ椿　陸舟松　一位之樹

開山履歴

開祖名夢窓字疎石　勅賜夢窓正覺心宗普濟玄猷佛統大圓國師大和尚は七朝帝卽

後醍醐天皇

光明天皇
光嚴天皇
後光嚴天皇
後圓融天皇
後花園天皇
後土御門天皇等の戒師なり
扶桑禪林僧寶傳云
國師諱智曜姓源氏勢州人　字多天皇九世孫（中略）九歲出家依乎平鹽敎院以居（中略）十八爲大僧受具
尋學顯密二敎一夕夢遊中國疎山石頭二刹一龐眉僧持達磨像授之爾善事之旣寤嘆曰洞明吾本心者其
唯禪觀乎遂更名疎石字夢窓謁無隱範公至于建仁寺繼參一山寧和尙乃至往萬壽見高峰日和尙乃至嘉
元年三月一夕坐久偶作壁勢身忽仆去豁然大悟作偈自慶有等閑擊碎虛空骨之句亟見高峰求印可峰喜
溢顏而囑曰西來密意汝今旣得之善自護持出其師佛光手書一通卑之以寓付屬之意云々
委しは夢窓年譜夢窓錄本朝高僧傳本朝禪林僧寶傳延寶傳燈錄等にあり

著名歷代

凡當山の住持たるものは貴胄甲族の門に出つ第二世周嵩西堂は足利義晴將軍の三子第四世鳳林和尙は勸

修寺大納言の男第五世承誠は市橋下總守の男第六世文雅和尙は四辻亞相の男第七世性峰は久留島信濃守の
男第八世承聰和尙は勸修寺黃門尹隆卿の男第九世龍門和尙は四辻三位卿の男第十一世北澗和尙は甘露寺大
納言の男等皆縉紳の公子たり就中著名なる二世周嵩は足利義晴將軍の三子にして卽十三代將軍の弟なり于
時周嵩世齡纔に十六才法階漸く侍者にして此名藍に主席たり故に當時の俗當山を稱して侍者の御所といひ
しとそ而して周嵩侍者の三好松永等叛逆の爲に義輝將軍と與に殺害せられしは載せて史乘にあり歷史家の
普く知る所なり第三世西笑和尙の如き當時一宗の泰斗にして而も文壇の巨擘たり秀吉家康等歸仰殊に厚し
文祿三年秀吉伏見に大光明寺を建立し西笑師を請し住持たらしめ其庫裡修營にあたりては秀吉諸大名に令
して勸進せしめ江戶大納言家康以下山崎左馬にいたる百二人各々自筆の勸進帳あり慶長二年八月大明國使
者至る其返翰たる秀吉西笑師に命して起草せしめ又朝鮮征伐に際し彼國の使者いたる是亦西笑師をして筆
談せしめ此他書契の事專ら西笑師をして掌らしむ或は大佛耳鼻塚供養の導師（卒都婆の文今尙之存）等の事俱に寺史に炳
焉たり秀賴家康等の歸仰亦之に同し第四世鳳林和尙は
文祿帝御外戚の因緣により
元和帝の寵幸最も厚く時々
鳳召に應して參內　每節禮は勿論諸所
行幸供奉或は於

宮中奉修
御法事或は奉對
御禪話又は詩聯之御會 天皇と鳳林長老と聯句聖護院法親王御筆二軸今尚之を珍藏す
献茶之御遊日夕奉陪
玉座時々賜
御物等の事不遑枚擧就中承應元年五月十六日
天皇御落飾前御着
御法衣御掛絡を拜領し同月廿三日
天皇御落飾に際しては奉
勅奉侍
玉座奉
御法式御調度の諸務を又承應三年九月賜
金縷伽梨及衣笠御製宸翰幷詩聯玉詠等 今尚存之
其後御歴代
明正天皇

後光明天皇
後西院天皇
靈元天皇
東福門院等御歸依又
後水尾天皇に同し蓋し鳳林長老か此蒙
恩寵もの一には
後陽成天皇御外戚の因緣によるといへとも抑又鳳林長老か法德の高峻なるに基由せさるはなし時々宮中の
御修法及時々の御禪話又は御落飾等の事皆長老法德のいたす處なり第五世文雅和尚も亦
至尊の蒙
恩寵每時 參內奉侍
玉座御法問御禪話等の事鳳林長老に異ならす就中延寶六年方丈
御勅營及本尊觀音薩埵の靈像又は佛舍利寶塔御寄附等の事皆文雅長老の法德による加之文雅東堂の當山興
復に効あるや大書院小書院をはしめ數多の棟梁鼎建嚴設諸般の什器悉く之を具備せしむ實に當山の中興と
云べし第十一世北澗長老も亦力を當山饒益に盡す事其効文雅東堂に亞ぐといふべし北澗和尚の後輪番の制
となり荒廢の餘を受けて貫宗長老の住せらるゝや恰も維新革命の後なれば寺祿は奉還し山林は上地となり

寺門の衰運殆ど其極に達す師則ち鋭意是が興復を企畫し官に請て修繕維持の下賜金を受け有志に圖りて保存の講法を設け前後兩度の大修繕を完成し拱北樓を再建し不動山の還附を得寺門維持の方法を確立し凡百の事物器具整然として完備す其功文雅北澗兩長老に讓らす實に當山再中興の祖と云ふへく一方貫宗長老を補佐した法嗣寛道和尚の功亦沒すへからさるものありかくて寛海和尚其後を董すやよく其遺旨を更けて寺門の經營に當り常足亭、新寮其他を完成し和尚遷化後現住敬宗其後を董すに到る

寺門格式

維新以前に於る寺門の格式を原ぬるに

一、朱印高三百五十石を有し本邨及西院邨の地頭たり

一、境内人足山林竹木守護使不入諸役免除境内東西十六町南北十五町の別朱印あり

一、樓閣には

後小松天皇宸筆究竟頂の寶額を掲げ

佛殿には

後水尾天皇御寄附觀音薩埵の靈像及舍利寶塔を安置し

殿堂は

後水尾天皇の勅營にかゝる依之

後小松天皇

後水尾天皇

今上天皇等の

御尊牌を安置し常に

先皇の御冥福を修し

今上天皇の聖壽無彊を懇祈し奉る等每歲々時又は

御踐祚御卽位の大禮及

崩御献經等に參內するの恒例あり

一、幕府の慶弔及朱印下付又は住持繼席等には幕府に參勤獨禮謁見の寺格たり

本寺相國寺に對しては附庸たるも他に對するときは本寺同樣の資格たり

一、僧官色衣は本寺同樣にして其住持たるものは官家の子弟又は猶子にあらざれば席を本院に繼がしめず

皇室關係

元西園寺といひし頃

御歷代の聖主又は皇后皇妃等數次行幸啓ありし事は古史に散見する處なるも年代遼遠なれば之を掲げす義

滿將軍開業以來に於る應永四年二月

後小松天皇行幸數日御駐輦同十五年再
同帝御臨幸清遊旬日にわたらせられ中古寛文元年には
後水尾天皇臨幸夕佳亭において献茶の
御遊あり本堂は
同帝の勅營にして本尊及舍利寶塔は
同帝の御寄附たり加之鳳林文雅二長老毎時
御物を拜戴し
靈元天皇は境内不動尊御信仰數時
御代參を立させられ近くは明治十年中
皇太后宮
皇后宮兩陛下行啓あり引續き修繕費として金七百圓保存費として金七百圓を賜り近く明治三十二年
皇太子殿下行啓等聖愛玉賞の靈刹たり

武將歸仰

足利義滿か佛日常光國師に歸し剃髪受戒終に各業を禪那の道場とあらたむるまでにいたりしは既に興造の
緣由に述ぶ其後秀吉家康の兩幕府が西笑承兌和尚に歸し浮田秀家が不動尊を信仰せし等其規模の見るべき

ものは秀吉家康俱に三百五十石の寺田を寄せ守護使不入の特權を加へ浮田秀家の不動堂再建是等なり

著名事項

一、當山は
天皇皇后妃等御臨幸行啓の聖跡なる事
一、當山本堂は
先皇の勅營なる事
一、當山本尊は
先皇の御寄附にして而も名工彫刻の靈像なる事
一當山は
先皇の宸翰幷時々拜戴の　御物を藏する事
後深草天皇宸翰
後龜山天皇宸翰
後小松天皇宸翰
正親町天皇宸翰
後水尾天皇宸翰

同帝御着黄生絹之御衣
同帝御物金縷之伽梨

一、當山は内外史乘に顯著の名跡なる事

葫蘆集　本朝文粹　京都將軍家譜　法皇外記　增鏡
北山行幸記　百練抄　相國寺御塔供養記　園太曆　都名所圖繪
管見記　中務司日記　椿葉記　山城名所誌　太平記
諸社根元記　二水記　雍州府誌　日本外史　長興宿根記
國史略等何れも當山及境内佛堂の事を掲載せり

一、當山は五百年以前の經營にして而も名人の設計にかゝる建物幷に林泉を存する事

一、當山は元亨釋書幷本朝高僧傳所載の高僧淨藏貴所の遺跡たる事

一、當山は詩歌及俚曲に著名なる事

一、當山不動尊は衆庶信仰のかゝる靈佛なる事

一、當山は有名の茶亭を存する事

貴重寶器

○御宸翰

一後深草天皇　一後龜山天皇　一後小松天皇勅額　一正親町天皇
一後水尾天皇

○皇族御筆

一本覺院宮瀧の畫　一淨照院宮御書翰　一輪王寺宮蘭の畫　一林丘寺宮山水畫
一大明院宮蓮の畫

○武將筆蹟

一尊氏公令狀　一義滿公和歌　一義持公達磨の贊　一義敎公下知狀
一義政公猿の畫　一家康公書翰　一秀忠公書翰　一秀吉公朱印
一家康公黑印　一伊達政宗書翰　一板倉周防守書翰　一毛利駿河守の畫

○高僧筆蹟

一夢窓國師　一佛頂國師　一絕海國師　一普明國師
一常光國師　一一山國師　一佛國國師　一佛光國師
一虛堂禪師　一一休禪師　一道元禪師　一大典禪師
一中峰禪師　一心越禪師　一澤庵禪師　一鳳林禪師
一白隱禪師　一楊月禪師　一江月禪師　一無學禪師

一横川禪師　一可翁禪師　一維明禪師　一敬義禪師

○像及書畫

足利義滿座像自作（明治三十四年八月二日國寶編入）

一親世音　定朝作　一夢窓國師之像　一三尊佛　運慶作　一巖屋觀音　惠心僧都作

一四天王之像 弘法大師作　一傳大士普現成像周文　一周之冕琴碁書畫　一仇英蜀棧道畫

一錢穀讀碑之畫　一兆殿司三行之畫　一張瑞圖書　一唐畫十六羅漢

一詹景鳳書　一健南師書　一定家卿色紙　一三玉集

一三體和歌　一雪村山水畫　一周文山水畫　一義政公月百首卷物

一元明人書卷物　一光信近江八景畫　一光孚三韓征討繪卷物　一沈子潤伯夷叔齊畫

一蕭白山水　一光琳達磨畫　一永眞出山釋迦鳳凰畫　一常信山水

一雪舟富士畫　一養朴達磨畫　一宗達韓退之騎驢圖　一仙嶺柘榴之畫

一應舉豆狗子　一能阿彌松月杜鵑之畫　一光琳須磨明石鳴門畫　一利長山水

一程赤城贊鯉之畫　一宗達萬歲之畫　一柳里恭墨竹　一元信寒山拾得畫

一東坡風竹之畫贊　一若冲箒狗子　一高泉釋迦之畫　一宗中書翰

一不昧書翰　一宗和書翰　一應舉趨倒淨瓶畫　一宗甫歌之富士

一西金居士羅喉羅之畫

○古器具類

一瓢形釜（藤四郎作）　一吳器茶碗　一蒔繪料紙文庫（小滿作）　一茅屋釜

一義滿遺品料紙文庫　一鹿蒔繪硯箱（光悅作）　一古伊部獅子香爐　一義滿遺品麒麟香爐

一夢窓國師鐵鉢　一木偶萬歲（大江定元作）　一古代物庚申　一高臺寺蒔繪水手桶

一古代青銅鉢　一瓢の煙艸盆宗和好　一唐桑小休臺宗甫好　一ハンヲラ水指

一建盞天目茶碗　一青貝天目臺　一青貝八角食籠　一青銅菊形花器

一咸陽宮古瓦硯　一相生硯　一老子騎牛香爐　一金閣四方の風鈴

一青貝入坐屏風　一義滿公冠　一貝百種　一唐製承露盤

一義滿公自作笏

○古屏風類

一四季艸花金屏風相阿彌筆　一菊の屏風光琳筆　一松人物畫　友松筆　一近衛三藐院殿の詩歌

一唐子遊び　蘆雪筆

歴覧順序（林泉案内）

殿堂

○方丈は延寶年中　後水尾天皇の勅營であります
○總體の襖の畫は狩野探幽の筆
○扁額は東明心越禪師の筆鹿苑寺は寺號であります通稱は金閣寺
○これから各所に陳列してあります軸物及いろ〳〵の寶物類はをり〳〵變りますから茲にはのせてありませぬ
○本尊聖觀世音は定朝の作　東福門院の御念持佛　後水尾天皇の御寄附で御座います右なるは開山夢窓國師左は開基義滿公法身の像
○向の椿は　後水尾天皇御手植ワビスケと申します
○前の石は女龍石其次は布袋石其次が走馬石其次が蟠龍石其次が露盤石と申し皆名石であります
○此松は陸舟松と申し天下の名木であります
○此額は朝鮮國海峰の筆
○此書院は貞享年中の再建
○總體の襖の畫は伊藤若冲の筆

○上段は　後水尾天皇臨御の玉座で御座います
○小襖の畫は住吉法眼廣道の筆

庭園

○むかふにもありこゝにもある大木は一位の樹と申します
○鐘樓の鐘は唐製で黄色鐘と申します
○あの傍の古墳は淨藏貴所の墓
○これが金閣と申し世に有名なる三階で御座います
○此所にならんである石は夜泊石其向は夜啼石
○この所を法水院と申し正面の三尊は運慶の作東墳は開山夢窓國師西墳は開基義滿公此像は稀代の傑作で國寶になりました
○此所は漱清と申して義滿將軍御手水の處向の石は畠山石石燈籠手前一つの石は赤松石
○あれなるは九山八海石こちらの二ッの島は出龜入龜と申します
○向の島は葦原島其手前なるは鶴龜島
○池の名は鏡湖池向の岡は紅葉山
○三層は究竟頂と申し扁額は　後小松帝の御宸筆

○天井は楠木一本で作つたと申します
○二階の名は潮音洞巖屋觀世音は惠心僧都の作脇立四天王は弘法大師の作天井の畫は狩野正信の筆

北　園

○此古廟は榊雲と申し當山の鎭守で御座います
○此水は銀河泉義滿將軍の御茶の水
○此水は巖下水義滿公御手水に用ひたと申します
○瀧の名は龍門其下の石は鯉魚石鯉の瀧のぼりの形で御座います
○此垣は金閣寺垣此橋は虎溪橋
○池の名は安民澤島の五輪の塔は白蛇の塚
○此石は貴人榻此石燈籠と手水鉢は義政公の愛玩
○數寄屋の名は夕佳亭金森宗和の好　後水尾帝献茶御遊の聖跡で御座います萩の違ひ棚南天床柱とは此所で御座います卽休の額は僧高峰の筆
○萩垣の眞中の木は鶯宿梅と申します
○此高どのは拱北樓と申し義滿公御居間の舊跡
是から不動樣へ御參詣の上御歸りなさいませ不動尊は當山開創以前より勸請せしものにて本尊幷に脇士とも石作の立像弘法大師の御作と申ます　靈元天皇の御信仰佛で御座います今の堂は天正年中浮田中納言の寄附と申します其傍に別に不動尊を安置してありますが之は化不動と申しまして靈驗あらたかに御座います
○堂後の名水は獨鈷水と申し弘法大師不動尊についての由緒が御座います眼病胃病などに効驗ありとて多く求めに參ります

因に古人の詩文を抄錄します

鹿苑寺記

故文淵（俗稱吉田藤吉（尾州人））

世以金閣爲通稱而呼其名者太鮮矣是大將軍足利氏義滿之所營造也以其法諡鹿苑爲寺號焉初鎌府之季失其鹿天下爭逐之祖尊氏與其族掎角獲之以一淸中原三世之主實爲義滿英偉有大略世居于室町邸世統御諸侯置管領于幕府以控制關東於是綱紀大張權勢日熾累遷大相國甞起別館于洛外相地四方山水淸絕無若此所乃大經營焉高閣三層帖飾黃金而銅鳳孤栖其屋巔名曰金閣下臨池水碧潭回環發其源于瀑流曰龍門又有湧泉二道曰盥漱曰煎茶皆合而注焉怪石巉巖秀立其中每各異形似島嶼榮時稱之鏡湖一時侯伯各献卉木以極奇觀其餘結構稱之前面野潤旁背山園宛如假山水距洛不能里餘而幽邃仙境其最秀者絹蓋山也一日帝臨于此館時維盛夏暑甚公絹素蓋狀以此山雪景一坐生寒矣亡幾公老遂以爲嘉遁之所遷居焉公崇信浮屠薙髮着法衣請夢窓國師而學禪應永中薨因以其居爲寺焉應仁中三好之賊爲亂火之殿堂牆屋一朝焚盡而求金閣在矣

林泉之景不改其舊有茶室以南天樹爲楹鶯宿梅爲柱以支床樹陰上覆石徑回攀曰夕佳亭額題卽休僧高峰之筆也
唐太宗山光佳日夕蓋是之意歟客殿至書院之間亘以長廊其地平坦以蔽有怪松一株大數圍剪成帆舟之狀如向鏡
湖其檣不過三四丈而舳艫三十丈實五百年前之物也傍書陸舟韓人海峰之筆揭之廊面焉或傳元弘以還天下大亂
皇統爲二南北各立其主兵爭不止公患之乃請
二帝臨幸於正館供帳甚整以饗焉而兩解之相約以二統代立爲定制是以池泉不設一橋者以表彼此無相隔也耳今
茲戊子之春子客于此院會　大內設博覽會場百芳方華不遑于洊觀以往還之有期不能悉其名勝焉是歲季秋再來
復淹留于斯講書之間略記所見聞而賦詩數篇祿于左
相公營造委兵燹一宇空餘五百年彩鳳常栖金閣頂青松倒浸玉池泉遙求遁跡唯遺造長駐英名已上仙請見林丘紅
葉地夕佳亭子煮茶煙
一世雄飛鹿苑公晚年營作蓋山宮淸幽不改林泉趣壯風猶存土木功奇石怪松留遁跡曲池高閣想英風兩朝南北連
和策全在將軍帷幕中
洛外名山寂不譁英雄遁處最稱嘉三層金閣臨池上無數蒼巖立水涯地比菟裘傾魯室排輞野壓五家傳閒盛夏絹峰
雪竟日　宸游駐翠華
高起池臺洛北邊淸風皓月足逃禪自分湯沐私家邑留結香花還佛緣兩祚構兵三四世中朝定鼎幾多年和盟誰是臨
牛耳一任關東執事權

美術建築としての金閣

京都府技師　阪谷良之進

金閣は鹿苑寺內に建てる一小建築であるが、寺の本名よりは、寧ろ此建築に因める「金閣寺」の方が昔から著名である、元來、金閣寺は佛閣として造られたもので無く、今を去る約五百餘年前に足利義滿の造營した北山御殿遺物である。應永十五年、後小松天皇この御殿へ行幸になつた頃には、境域も廣大で且つ多數の殿宇が完備し、特に御座の殿は八棟造の極めて莊嚴なものであつたといふ、義滿の死後禪刹となつて鹿苑寺と號した。爾來幾多の變遷を經て當初の殿宇は盡く廢滅又は改造せられたが、ひとり此の金閣のみは創建のまゝ完全に保存せられ今日なほ昔の俤を傳へてゐる。それ故此の建築を通じて當時の北山御殿の有樣を知り、引いては室町時代最盛期の縉紳の邸宅の結構をも可成り具體的に伺ふ事が出來るのである。かくの如く金閣は歷史上最も貴重なる資料であるばかりでなく更にその建築學上の見地から觀察するに現存の住宅建築の中美術的要素の豐富なる點に於いて此の右に出づるものはない。以下美術的建築としての金閣に就きいさゝか所見を披瀝して大方の敎を乞ひ度いと思ふ。

さて、金閣は苑內の池に臨める三層樓で、實形造の屋根は葺くに柿を以てし、頂上に金銅製の鳳凰を置

いてゐる。各部の用材は比較的に細く、屋根の傾斜は緩やかに、且つ薄き軒先は兩端に於いて上方に反轉するので全體として頗る輕快優雅なる外觀を呈してゐる。右方池中に斗出せる切妻造りの附屬屋は又一段と趣を添へ、一見直ちにその設計の方針が專ら周圍の明麗なる風光との調和にある事を看取する事が出來る。かゝる方針の下に設計された建築は往々にして潑溂たる生氣を缺き平凡單調に陷り易いものであるがつぶさに此の建築の各部の形式手法を比較研究して見ると全く豫期に反し、反つて驚ろくべき周到巧妙なる方法を以て縱横に意匠の變化を試みてゐるのに氣が付く。

先づ各層の平面を見るに下層と中層は共に長方形にして柱の位置も亦上下一致してゐるが上層は特にその形を變へて正方形となしその柱の位置は下層のものに何等關係なきを以て宜きに從つて上層の大いさを定める事が出來る。此の長方形と正方形を重ぬるは木造建築にありては構造上の無理が生ずる爲め普通用ひざる方法であるが、此の金閣に於いては上下の平面に變化あらしむる爲め、かゝる手段に出たのである

更に各層を細かく對比するに、初層は正面全部を廣椽とし、建具は主として蔀戸を用ひ、外部は白木造白堊壁となし、內部は處々、素木の上に直ちに極彩色を施してある。次に中層は正面左半部のみを廣椽に充て、建具は舞良戸及板唐戸を用ひ、柱間は篏板張りとし、內外總て蠟色塗となす。なほ內部天井及長押等には漆地の上に天人、靈鳥、樂器、雲等を彩繪する。最後に上層は廣椽を設けず、周圍の入口には棧唐戸を建て、其兩脇に華燈窓を設け、內外悉く漆地に金箔を押してゐる、是れ卽ち金閣の名の起つた所以である。而して其樣式は下層を藤原時代の寢殿造に擬し上層は純粹の唐樣（禪宗佛殿に慣用された特殊の形式）を用ひ、中層は內部を稍々複雜に間仕切りたると、建具の形式、其他により判斷すれば、多分鎌倉時代の武家造の俤を存してゐる。

以上述るが如く意匠の自由豐富にして、手法の變化多端であるにも拘らず、全體として穩雅淸新なる氣分の下によく統一せられ、觀者をして、些の不快澁滯の感を抱かせない點は如何に當時の建築家の手腕が非凡であつたか想像するにあまりある。

蓋しかゝる設計は從來未だ嘗てきかざる所なるが恐らくはその着想を古代の住宅建築たる寢殿造及武家造に求めこれに佛寺建築の長所を加味して一新棧軸を出したものと思はれる。これを要するに金閣は我國現存の住宅建築中最古にして兼ねて最美なるものといふを憚らない。

再中興貫宗長老略傳

當山再中興貫宗長老は幼名を宗一と稱し尾陽東春日井郡鞍掛村に生れ父は德川源敬院殿の御菩提所定光寺の役人にて名を周藏と稱した。師は十六歳にして、州の大林寺に入りて剃髮得度し十八歳の秋京都相國寺專門道場に掛錫し本光老師の鉗鎚を受くる事實に十五年の久しきに及び三十三歳の春初めて當山の住職となり荒廢其極に達せる當山の經營に當り兼ねて幾多の社會事業に苦心奮鬪を重ね明治四十一年二月廿五日世壽七十三歳を以て溘焉として示寂された。

顧れば德寛に才穎優にして應世の器を具した師は荒廢其極に達せる維新後の當山に住し槇村知事の廢佛主義と鬪ひ、遂に上地の返還を請ひ金閣保存會を興して寺門の復興に精勵すると共に、五山の隨一たる相國の山規及び寺產漸く紊れて收拾し難きに當り東奔西馳苦辛慘憺遂に一山を磐石の安きに置き尙廣く禪門各派の爲めに貢献する處頗る多きものがあつた。現今の京都府立醫科大學附屬療病院の前々身たる療病館は實に師の創設せる處にして、病者爲めに救はれ道俗共に師の德を頌せざるものはなかつた。師は常に茶儀生花の道に親しみ亦圍碁に長じ、伏見宮を始め奉り各宮殿下の恩顧を受け大官縉紳の來訪踵を接いだ殊に伏見宮御殿の御召に依り時々伺候して、烏鷺を鬪はして、其寵遇を受け、一度び病革まるや殿下には特に親翰を賜はりて厚く慰問せられたなど師の名譽此上もなき次第であつた。

示寂後時の相國寺管長中原東嶽禪師は祭粢料を贈り誄辭に、本山の柱石、本職の股肱を失へりと悼惜せられたるが如き蓋し師の一般を窺ふに足るものである。

大正十二年二月十日印刷
大正十二年二月二十日發行
編輯兼發行者　京都北山　伊藤敬宗
印刷所及印刷人　京都市油小路下立賣南入　佛教藝術院　中野彌吉
發行所　京都北山　金閣寺

The small building near the stone is called Sekkatei and is a typical bower for ceremonial tea-drinking. It is said that the Emperor Gomino-o favored a visit and enjoyed tea-drinking here. It contains a celebrated pillar made of a nandlam tree about 9 inches in circumference. At the building, there is also a stone called Kijin-jo or Chair-stone. It was so named according to its chair-like shape. Outside is a stone basin in the form of Mt Fuji.

Now visitors have seen all the garden, it will be worth while, on the way end, to see the Fudo-Temple. This temple seems to have been built long before the foundation of this Kinkakuji. Just behind the temple there is a little spring called Tokko-sui. There are some traditions about this spring.

The water of this spring is believed to have many virtues for various diseases, and many folks come here for the water.

paid a visit to the temple. The pictures of the small sliding screens were painted by Hōgen-Hiromichi. (So much for the temple, now the visitors will be introduced through the garden).

The big trees here and there are called Ichii-no-ki. The bell in the bell-tower is said to have been made in China and called Ōshikisho or Yellow-Coloured-Bell. The old tomb by the bell-tower is where Jozo-Kisho was buried.

Now the visitors have come to the

Kinkaku or Gold pavillion.

There five stones are named Yahaku-seki and it is said that they were carried from China. The place is called Hosui-in and the three images, just in front were all sculptured by Unkei, very famous sculptor; the image in the eastern alter represents Musokokushi, the first abbot and one in the western alter Shogun Yoshimitsu, founder of this temple. These sculptures are all master works of art and have been added to the national treasures. The next place is called Sosei, where Yoshimitsu used to wash his hands.

The name of the pond is Kyoko-chi or Mirror pond. It contains many small islands and oddly shaped stones.-Degame (or going tortoise) and Irigame (or Coming tortoise.) and Ashihara Islands. Hatakeyama-ishi Akamatsu-seki and Kyu-Zan-Hakkai-

seki etc.

The third story of this Kinkaku is called Kukyo-cho. The tablet bears an inscription written by the Emperor Gokomatsu (1393-1482). The ceiling of the third story is said to be made of a single board of camphor-wood. To the west of the building is seen the symmetrical form of Kinukasa-yama or Silk-hat-mountain. According to one tradition, Yoshimitsu had it covered on a hat summer day with white silk in order that it might appear as though it were covered with snow.

The statue of Kanzeon in the second story was sculptured by Reverence Eshin. The other by Kōbo-Daishi (779-835). The picture on the ceiling were painted by Kano Masanobu. (So much for the Gold pavillion. Visitors will be introduced to the northern garden).

The very old Shrine in the garden is called Shin-un. Near by the shrine are springs called Ginka-sen or Silver spring and Ganka-sui, or Rocky spring. The Ginka-sen furnished Yoshimitsu with water for use in the tea ceremonies. Ganka-sui is said to have been used for washing hands by him. The water-fall is known as Ryumon-no-taki or Dragon's. The big stone below the water-fall is called Rigyo-seki or Carp-like-stone. The bridge is called Kokeikyo. This pond name is Anmintaku. The small tower in the island is white snake tomb.

A SHORT HISTORICAL SKETCH

OF

THE KINKAKUJI.

KINKAKUJI, whose proper name is Rokuonji, belongs to the Zen sect. It was a pleasure house of Saionji Kimitsugu. At the end of the 14th century Ashikaga Yoshimitsu, after abdicating the shogunate, retired to this place where he became a Buddhist monk. Here he made a beautiful. garden containing a pond, on the bank of which he had Kinkaku or Gold Pavillion constructed. This famous Kinkaku has three stories and the upper one is the Kinkaku proper. Its ceiling, railing etc., were once embellished with gold, only a very little of which remains at present.

Guide to the Kinkaku Temple and

its Garden.

[Visitors are first introduced to the buildings]

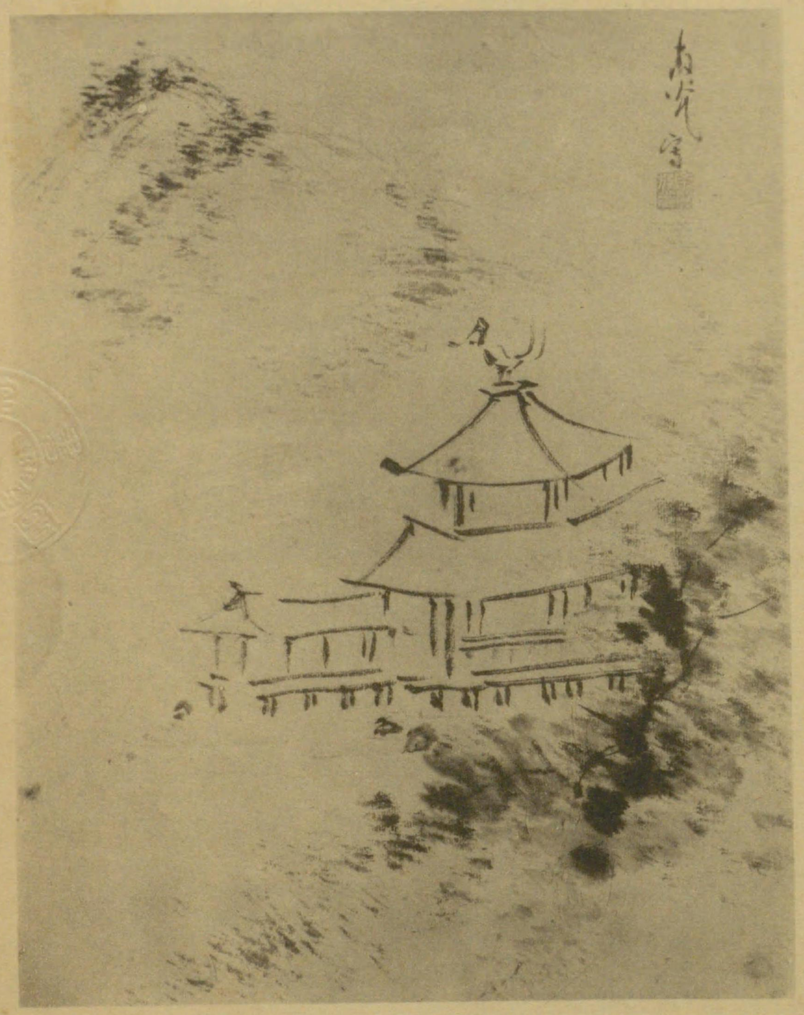
The Hojo, or abbot's residence, was built in accordance with the order of the Emperor Gomino-o during the Empo Era (1673-1680) All the pictures on the sliding screens of this room were painted by Kano-Tannyū, one of the most celebrated painter at that time. The tablet bears an inscription Rokuonji written by Chinese reverence priest Shingetsu. Rokuonji is the proper name of this temple, Kinkakuji being the popular one. (All the hang-

ing pictures and antiquities and various other treasures which are exhibited in this room are often changed So the history of these things are omitted here.)

The chief image is a sitting statue of the Sho-Kwanzeon by Jocho. It was, it is said, enthusiastically worshiped by princess Tofukumonin and was given to this temple by the Emperor Gomino-o (1612-1680) the image on the right side represents Muso-Kokushi, first abbot; and that on the left, Ashikaga Yoshimitsu, founder of this temple. In the garden before the Hōjō, there is a noted camellia tree, which is said to have been planted by the Emperor Gomino-o inperson.

All the big stones in the garden are celebrated for their peculiar shapes; the first one is called Me-ryo or Female Dragon, next one Hotei-ishi; next one Sōma-seki or Running Horse Stone; and the last one Roban seki, or Receiving dew stone. At the back of this building there is the famous and curious Rikushu-no-matsu or Land-Boat-Pine, which is trained in the shape of a Japanese junk about five hundred years old. The inscription of the tablet was written by Kaiho, a Korean.

The Sho-in or drawing room, was rebuilt during the Teikyo Era. (1684-1686) All the pictures on the sliding screens of this room are the works of Ito-Jakuchu (1715-1800), The elevated floor was for the use of the Emperor Gomino-o when the Emperor



(画光放住現) 画意寫閣金

THE SHORT GUIDE BOOK

TO

THE TEMPLE AND THE GARDEN

KINKAKUJI.

KYOTO JAPAN

160
117

鹿苑寺

宮内省書陵部